

[生命]

イニユニツク

アラスカの原野を旅する

星野道夫

Michio Hoshino

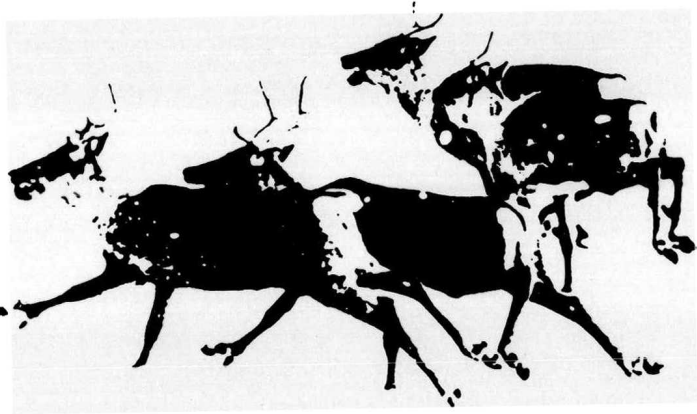


[生命]

イニユニック

アラスカの原野を旅する

星野道夫



新潮社

◆著者について

1952年千葉県市川市生れ。慶應義塾大学経済学部卒業。
アラスカ大学野生動物管理部に4年間留学。以降アラスカ
で撮影活動に入る。89年「アラスカ 極北・生命の地図」
で木村伊兵衛賞受賞。写真集に「グリスリー」「ムース」
(平凡社)、写真文集「Alaska 風のような物語」(小学館)
がある。



イニクニック ^{せいめい}〔生命〕

アラスカの ^{げんや}原野 ^{たび}を旅する

^{ほしのみちお}
星野道夫

発行——1993年12月15日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162/東京都新宿区矢来町71/振替 東京4-808

電話—— 営業部 03・3266・5111

編集部 03・3266・5411

印刷所——錦明印刷株式会社

製本所——株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります。

© Michio Hoshino 1993, Printed in Japan

ISBN4-10-395601-1 C0025

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

イニユニック〔生命〕——アラスカの原野を旅する 目次

I 家を建て、薪を集める

7

II 雪、たくさんの言葉

29

III カリブーの夏、海に帰るもの

55

IV ブルーベリーの枝を折ってはいけない

85

V マッキンレーの思い出、生命のめぐりあい

115



VI 満天の星、サケが森をつくる

141

VII ベーリング海の風 163

1 アリュートシャン、老兵の夢と闇

2 ベーリンジア、消えた草原

VIII ハント・リバーを上って

193

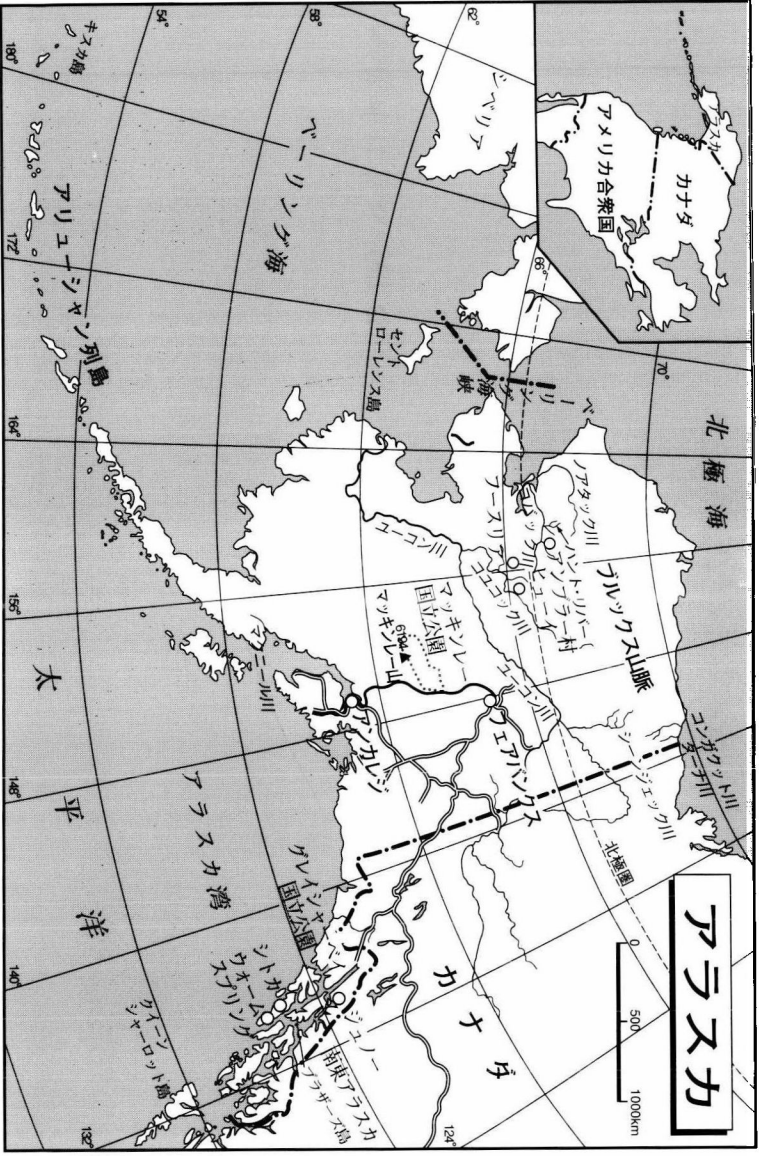
あとがき 228



写真||星野道夫 装訂||三村淳
写真協力||アニマルズ・アンド・アース

イニユニツク〔生命〕——アラスカの原野を旅する

アラスカ



I
家を建て、
薪を集める





残照に輝く湖のほとりを行くグリスリー

「ミチオ、私にだまされたと思つて買いなさい。いい森だから！　そこに家を建てればいい」友人のカレンから急用の電話が入ったのは、一九八九年の六月のことだった。カレン一家の住む、フェアバンクス郊外の森の一部が売りに出るといふ。早い話が彼女の土地の隣なのだ。以前、そんな話をカレンにしたことがあった。「いつか、アラスカに自分自身の家が欲しい」と。

しかし、急にそんなこと言われても資金などありはしない。

「ちょうど山の上だから土地は平らだし、とにかく眺めがいいの。タナナ川が見渡せるし、晴れた日はアラスカ山脈も見えるんだから。あのね、こんなチャンスはもうなかなか無いからね！」

カレンはほとんど僕を説得しにかかっていた。夫のマイクもできるなら買ったほうがいい

と勧める。マイクは以前、グレイシャーベイ国立公園のレインジャーをしていて、十年前、僕がカヤックでそこを旅して以来の友人だ。奥さんのカレンは、日本文学で博士号をとり、今は宮沢賢治の研究をしている。二人とも、僕が隣に引越してくることを望んでいた。

しかし、現実の話としてはやはり程遠い。それでも、ある夏の夕暮れ、僕はその森を見に出かけることにした。

シロトウヒ、アスペン、そしてシラカバの木が混じった、小高い丘の上の森だった。アラスカでは、この三種の木がそろった土地は良いとされている。例えば、クロトウヒだけの森は、その下に永久凍土が隠されている危険がある。そんな土地に家を建てたら、いつの日か傾いてしまうだろう。フェアバンクスは北緯六五度。もう北極圏に近い。

黒々として、空に突きささるように立つシロトウヒの針葉樹が僕は好きだ。そこに、アスペンやシラカバが混じっていると何かホッとす。さらさらと風に揺れる葉音。女性的な木だが、秋の黄葉がすばらしい。

ハイブッシュクランベリーの灌木を分け入ると、夏草の匂いがした。ヤナギランがピンク

の花を咲かせている。ゴゼンタチバナが白い花をいっぱいに広げている。

苔むした森のカーペットに、固くコロコロしたムースの冬の糞が落ちていた。水気のないヤナギの枝を食べなければならぬからだろう。ムースがここまで出てくるのか……。きつと、隣のカレンの野菜畑にも入っているはずだ。夏に取り残した野菜を、ときどきムースが食べにくる、と言っていたっけ。

チチチチチ……、アカリスがトウヒの幹を駆けのぼり、枝の上から僕に向かって鋭い警戒音を発している。どうやら僕はここへの侵入者らしい。「この森に何をしにきた！」とでも叫んでいるのか。

倒木の上に腰かけ、しばらくぼんやりしていると、何だかうれしくなってきた。まずいな。資金も無いというのに、一体何を考えているのだ。このうまく説明のできない気持ち広がってくる、僕はいつも一気に走ってしまう。おまけに、夏の夕暮れの、ゆるやかな風が頬を撫でている。風の感触は、なぜか、移ろいゆく人の一生の不確かさをほのめかす。思わはずらうな、心のままに進め、と耳もとでささやくかのように……。

この十二年間、いつも旅をしていた。小屋を借りていたので、帰ってくるペースはあった。

しかし、そうやってどれだけ長い時間をアラスカで過ごそうと、結局僕は旅行者だった。この土地にもっと根をおろしたいと思い始めたのは、もう二三年前からだったろうか。カレンからの電話は、ちょうどその思いが熟した頃に鳴ったのだろう。

夏の間、どこにいても、その森のことが頭の片隅にあった。二エーカー（約二千四百坪）、二万七千ドル（約三百五十万円）か……。土地だけは何とかなりそうだ。でも家を建てる資金はどうする？

七月、南西アラスカのミクフィック川にいた。アラスカ野生生物局でクマの調査をしている友人、ラリー・オーミュラーと一緒にいた。ラリーもまた、二十年程前にアラスカにやって来て、そのまま住みついてしまった人間だ。アメリカ合衆国としてのアラスカの歴史はまだ新しい。この土地に生きる多くの人々が、ある時、何かを求めて、アラスカに渡ってきたのである。この旅で、ちょっととしたエピソードがあった。

ある日のこと、僕たちは川岸からクマの親子を観察していた。春に産まれた二頭の子グマを連れたグリズリーだった。産卵に上ってくるベニザケを、母グマが必死になって捕まえ、

子グマに食べさせている。そのシーンは見ていて飽きることがなかった。ラリーはこの母グマをテディと呼んでいた。長い間このミクフィック川流域のクマの調査をしてきたラリーは、この土地の多くのクマの個体識別をすることができる。

実際、ラリーほど深くクマと関わった研究者を僕は知らない。約二十年、毎年夏になるとミクフィック川流域のクマは一人の人間と出合い続けてきた。調査という一線を越え、彼と野生のクマとの間にはある種の感情が生まれているような気さえた。それはラリーの生物学者としての資質というより、彼の深い人間性に根ざしたものだ。その是非はともかく、僕はラリーを通して、種というものはくくりきれない、それぞれのクマがもつ多様な個性の存在を知った。

しばらくして、母グマは二頭の子グマを連れて少し離れた川岸に上がると、草を食べながらゆっくりこちらに向かってきた。僕らがここにいることを知っているはずである。

「もう動かないほうがいい。このままじっとしていよう」

ラリーが小声で言った。母グマは止まる様子もなく、どんどん近づいてくる。僕はどうしていいかわからず、次第に不安になってきた。